

家畜化が動物と ヒトに与えた変化

環境考古学研究室 准教授
本郷 一美 (Hitomi Hongo)



Q: いま一番知りたいことは？

先史時代の人類がどのような動物をどのように利用していたか、です。研究の材料は主に西アジアの新石器時代の遺跡から出土した動物の骨です。現在のトルコ南部、シリア、イランは、紀元前1万年前ごろにウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタが家畜化され、ムギ、マメ類の農耕が始まった場所です。それまで狩猟の対象だった動物を飼育するようになる過程で、ヒトの社会にも動物の行動や形態にも変化が生まれました。動物の死体から得られる肉や皮革を利用するというヒトと動物の関係が、動物を管理し繁殖させ群れとして維持し、生きた動物からその生産物、——ミルク、毛、労働力などです——、を繰り返し採るという関係になっていきます。

Q. いま課題だと考えていることは？

少し前までは、植物を栽培し動物を飼うことにより食料を自ら生産するようになったことが、人類の社会に大きな変化をもたらしたと考えられ、産業革命に匹敵する「新石器革命」とであるとさえ考えられていました。しかし、食料生産以前である紀元前10000年ごろの西アジアの新石器時代には、強力なリーダーのもとにまとまり、大規模な建造物を作り、「神殿」での祭祀を行った集団がいたことがわかってきました。日本の縄文時代の人々も、複雑な社会構造を持つに至ったとみられます。自然の資源に関し高度な知識を持ち、うまく利用していたが、結局本格的に農耕や動物飼育をするには至りませんでした。それでは、栽培化・家畜化（ドメスティケーション）が進行した地域ではどのようなきっかけで変化がおこり、動植物やヒトの進化という観点からドメスティケーションはどのような結果をもたらしたのでしょうか。課題はなぜ農

耕と牧畜が広く世界中に広がるに至ったのか、その経緯を明らかにすることです。



Q. 当該分野の今後の展望について考えていることを教えてください

動物が家畜化され、ヒトとの関係が変化し、経済的に重要になっていく過程で、動物の側の行動・繁殖システム・認知機能がどのように変化したかについてはまだわからないことがたくさんあります。家畜化の過程で動物の側に生物学的な変化が生じ、ヒトの側には所有権や社会階層が芽生え心理的な変化が生じました。家畜化について多面的な研究が続けられ、動物とヒトの相互関係の変化が解明されることが期待されます。

Q. 研究をしてきて一番楽しかった瞬間、難しく感じた瞬間は？

国内外のいろいろな場所での野外調査（発掘調査）で、現地の研究者、学生、一般の人々と話したり、一緒に働いたりした中で、楽しかった瞬間がいろいろありました。難しく感じたことは、調査地の中近東の国々では研究も紛争の影響を受け

中断したり、日本からは行けなくなったりしたことです。もちろん、調査中の日々の生活の中でも、いろいろなトラブルや文化的な違いからの誤解も生じます。でも、そのようなことも含め、調査に出かけるのは楽しいです。



**Q. この分野の研究を志す学部生や大学院生の方にメッセージをお願いします。
また、研究以外で趣味があれば教えてください。**

趣味はウマに乗ることです。子どもの時いろいろな動物や鳥を飼っていましたが、馬は家では飼えないので乗馬クラブへ通っていました。研究対象はウマを含むいろいろな動物の骨なので、生きた動物を見たり動物に関する文献を読んだりするのが楽しいということは、仕事のうえでも得です。みなさんも、研究して楽しい、愛着があるものを研究対象に選ぶといいと思います。